## 徘 句に集う一人ひとりの秋がある 神々は皆酒が好き里神楽 惜しみつつ枯れ菊を焚く夕べかな 岸の景微動だにせぬ冬の沼 暮れかかる雨の枯野の重さかな 花八ッ手こんな静かな日もありて吉原 見上げれば裸木の中は空の碧 魔女の乘る箒落葉をかき落とす くさめして手元狂ひし花鋏 送る先ありて倖せ柿吊るす 生姜湯や八十歳は絵空事 虫喰いの小豆を撒きて雀呼ぶ 燕去り色なき里の空となる 白菜を括る筑波のよく晴れて 診断は加齢と言はれそぞろ寒 マフラーをふはりと庭のポストまで 【茂山俳句会】 【桜川市岩瀬 トの墓雨風除ける菊の花 句 萩 俳句会] 植田 皆川 萩原きし 齋藤 永瀬 細谷 荻原 小林 竹林 海老沢幸子 渡部千恵子 金田とう女 海老沢静夫 若色寿美女 入山ひろ子 一代みちよ 秀子 啓治 祥雲 てる みよ ち 充女 女 0) 11 るさと偲ぶ 異郷にて暮らし続け 【桜川 手ほどきの編み物長きくさり編み 山里に住みこせこせと冬支度 短

たらちねの母は小さき窓小春 気がとがり音もとがりて日の短か 宮本 宮本 立男

峡部落余さずつつみ山眠る 赤ワイン提げて友来る初時 雨 鈴木 吉原 芳江 京子 つぎ

山茶花の散りては咲きし日数かな 松崎 いま

泉 健作

鈴木ノブ子

久に会ふ姉妹の会話日短し 冬ぬくし丸太の橋を渡りゆく

大関 くに

君島真理子 金子

晩学の読書三昧開戦日 弘毅

くつきりと冬夕焼けに富士仰ぐ 田崎 信子

初時雨ピストルのごと傘ひらく 笠倉 陽子

図書館を出て短日の主婦となる 飯山 昭

空高く真澄みて寒し午後の風 梅井 光子

一般投稿]

勤行川に長旅終えて里帰り鮭 にセンサー 鮭稚魚は海で育み里帰り迷うことなき背びれ の遡上は街おこ 貞之

さくらが

しなり 洋子

鮭見つ 旅終えて最後の力ふりしぼり勤行川に跳ねる 滝田きく江

の哀れ上 「おかえりな祭」 産卵し力のつきて骸 塚 節子

鮭の亡骸 中島 龍子冷えびえと水面を照らす川波の底にしづもる

し風景 ごうごうと心に沁みる瀧の音鮭 の遡上の済み 中原すみ子

俚

【さくら俚謡会】 謡

昔杵搗き今では機械何れ劣らぬ餅の味 つく志輝美

りでかい 新春 岩瀬 初日仰ぎて今年も無事に過ごせますよう祈る お餅を頬張る女がのざえ涙がついほろ

勤勉実直かかあの家来今年も亭主の顔でいる 稲葉 建正

馬が嘶き初日の目覚め祝う新年屠蘇を飲む 哲人

歌壇の会

し半世紀

鮭の遡上にふ

青磁

歌



木みどり

